

大隈言道自筆資料 『自詠集中抄』

— 言道門下小林重治家集 — (三)

進藤康子

前回に続き、江戸時代後期に活動した福岡の歌人大隈言道の自筆資料を紹介する。

— 言道歌壇の中心人物のひとり、飯塚の小林重治の歌集を、師である大隈言道が添削し、添削を加えた後、清書したものである。翻刻に於ける凡例は、初回（第十巻第一号）を参照のこと。

五色のうたのうち 黄

136 てにもたるみちのく山のかねはな

こゝろの風にちりみちらすみ

137 庭のおもはこのは吹ためこのころは

こす糸によわる風のおとかな

138 いつこよりしほはみちきてひるならむ

あやしきものはおほかみのほらか

139 おほそらにのほると誰かいひそめし

くもはかりこそたつと見えしか

140 よの中になはかりたつをうつし糸の

外にすかたを見し人やある

141 月かけのこゝろの水にすみぬれは

にこりもやかてひかりさす也

「(19・ウ)

142 いはくゝる水のとたえてこほりたる

うへをなかるゝ月のかけかな

143 よあらしはいたくな咲そちとりさへ

よこきりかねてこ糸むせふ也

144 いましはしあさひなてりそまちくし

はつゆきふれりにはのこす糸に

龍

「(19・オ)

- 145 常はさはそれとこゝろにかゝらねと
ゆきに見にくきまとの蛛糸 「(20・オ)
- 146 あけぬまにはるやきぬると人こゝろ
まつおとろかすには鳥のこゑ
- 147 わかみつをくむ井のものいと柳
めにかゝりきぬはるのはつかせ
- 148 よはなへてうれしかほなるはつはなを
いまたはゑまぬ軒のうめかな
- 149 わらはへのうゑにしうめもことじより
ひとつふたつはさきそめにけり 「(20・ウ)
- 150 こゝろなきわれをうらむなうめの花
さしもさかすはさくもをらめや
- 151 うくいすはひとくとなけとたれもこす
ひとりさひしきはるさめの空
- 152 はるさめのふるいのしたにたえかねて
もえいてにけり野へのわかき

- 153 垣こえしかたえのうめの花さかり
今はとなりのものならなくに 「(21・オ)
- 154 まつにのみなれかほになくうくひすも
まれにはうめになとかうつらぬ
- 155 おとたてゝよりくる波もなれぬらん
すさきの鷺も立もさわかす
- 156 となりたになき山さとの垣ほにて
あさるくたかけきつにはまれな
- 157 ゑをもとめ友よふかけのこゑきけは
おのれ獨はむさほら^のしとや^り 「(21・ウ)
- 158 あるしもわれをおもひてなれぬらん
手にとるまでにきよる冢鳩
- 159 ゆふかすみかゝるさひしきのへにまた
もすかなくねをそへてける哉
- 160 ひとりねのとくにさひしくなりぬらん
やもめかこすみよはになく也

- 161 さきさかぬうめの梢にふるあめは
うしともおもひうしともおもふ
「(22・オ)
- 162 わたる人心よらぬはなかりけりはしの
あなたのをやきのいと
- 163 うしのをおひはなてともわかくさは
またはむほともなき野なりけり
- 164 わかごとく人もめてきてしきつらむ
花のこかけにのこるさむしろ
- 165 あをふちにえたうちたるゝさくらかな
あやふく見えて人におられす_を
- 166 さく花とおもふとちなるはるのかせ
ふきたゆむまはたゆみてそちる
- 167 きのふけふこす糸のわかは吹かへし
なつきかほなる風のさまかな
- 168 花ちりしかたみとおもへはさくらのみ_子
あをはの中に見るもなつかし
- 169 ほとゝきすなくこ糸たにももらしかし
あまりにしけるにはのわかには
「(22・ウ)
- 170 しけりあふわかにはかけをくたかれて
このまもりくるなつのよの月
- 171 月かけのいたらぬくまをもとめきて
こゝろのまゝにとふほたるかな
- 172 てにちかくなりぬとおもへはいくたひも
ひかりきえつゝとふほたるかな
- 173 月ゆきにまかふと人もいひてしを
むくらかなかにをしきつの花
「(23・オ)
- 174 おとまかふのきはのすゝもとりすてよ
山ほとゝきす今もなくへし
- 175 さみたれにほたるもそらをとひかねて
しはしやとなる故郷のゝき
- 176 としことになやらふわさをもれいてゝ
ことしもさけるにはおにゆり

- 177 たのみある秋はおもへとこのころの
 てるひのかけのあまりなるかな 「(23・ウ)
- 178 うぎ友をよそにすくして山守の
 ちりにましらぬ風にすゝまん
- 179 わかせとの川のなかれにけふもきて
 たはわさしけるうなぬ子のもと
- 180 ほとゝぎすまつためうゑし橋も
 こたかたらねはしらてすくらん
- 181 市人なかのさわくそらなるほとゝぎす
- きくひとも なきしに名のりのみして
 「(24・オ)
- 182 わかやとのさら啼すくるほとゝぎす
 夕風よりもこゑそすゝしき
- 183 ほとゝぎすなくとてかとに出見れば
 月のおもふく風はかりして
- 184 すそにこそきてましものをふしはかま
 をりてもかたにかけてけるかな
- 185 水草のうちにまされる川蓼の
 からきうきせをわたりかねつゝ
 「(24・ウ)
- 186 うちまねくおもとを垣にとちられて
 ほにいてかぬるしのゝをすゝき
- 187 北のまと戸のすきまよりくゝりきて
 ほね身をさへもとほす秋風
- 188 はつかりのなきこし空をみてしまに
 ふもとのいち路くれはてにける
- 189 たゝひとり水にやとれる月ながら
 野にあまりてもちらしぬる哉 「(25・オ)
- 190 ゆふされはもみちのありかわかねとも
 しかのなくねにそこかとそ見る
- 191 むしのねもなきからしたる秋の夜に
 時めくものはきぬた也けり
- 192 こまとめてしはしなかむるあしき山
 あしといふ名は 名たかへそかし いかておふらん

- 193 ぶみてもこゝるとまらぬやぶれあみ
みなもこしつゝ行へしられす 「(25・ウ)
- 194 ひのもとむかしもしらて唐国の
みちぶみ見よし時もありけり
- 195 いろこきはしくれにちりて薄もみち
まはらにのこる庭そさひしき
- 196 やまさとは夕さひしきこからしに
くりのみおくる冬はきにけり
- 197 このころのしくれのそらにならへてむ
てれくもりある人のこゝろは 「(26・オ)
- 198 くるかねのつゝにひなはをとりそへて
かり人さわく冬の山さと
- 199 神無月日影もとめてほす網なみの
ひるまなけなるにはのおもかけ
- 200 節あけておとろくかどのはつゆきに
あとをなつけそつまやちの駒
- 201 よひに寝しふしとやよそにうつすらむ
しもさゆるよのそらのかりかね 「(26・ウ)
- 202 風もなくゆきふる柳おもしろし
はるのみとりはものゝかすかは
- 203 のきはよりなたれて雪のおつる日は
さむさもたゆむこゝちこそすれ
- 204 わかまちしもはとひきて心なき
人ふみしおくやとのしらゆき
- 205 とくへきほとまちわひてにはの
きのふのゆきもけふは消けり 「(27・オ)
- 206 ことしけきはすのとしのあき人は
こゝろそらなる今夜の初雪
- 207 ひとゝせに二度まめを内に外に
たゝすむおにはあらしとそおもふ
- 208 きのふけふこのめもはるのゆきふりて
もゝやたゆめるせとのを柳

- 209 すみれさく野にねむまてはおもはねと
 しはふのうへは立うかりけり 「(27・ウ)
- 210 かすならぬ小草もゝえぬつめやなき
 なれはかりなるはるとほこるな
- 211 うめのはなをりにきつれとくひすの
 なくなるこゑにこゝるまとひぬ
- 212 いとまなき身は鶯のはつこゑを
 ちりにしうめの梢にそきく
- 213 つきぬへきほとまちなて心なく
 花のつほみをつむわらはかな 「(28・オ)
- 214 花もさく無わたるわさもいとまなし
 いかゝはすへきわかみ一を
- 215 かはなみにかけくたかるゝさくら
 花まことならねとしつ心なし
- 216 たかこれを一木とさらにおもふへき
 つしまのさとは花かけにして
- 217 わかやとのあれにし後もさくらはな
 これはかりには人め見えなむ 「(28・ウ)
- 218 うゑおきしわかきの花のさき初て
 人にしらるゝやとゝなりにき
- 219 う月とてけふみほとけにそゝくゆは
 わか身のあかをあらふせけり
- 220 めもはるに麦のほなみにうちましり
 ゆたけくすめる民の家かな
- 221 ゆたかなる御世そうれしきいとまなき
 わかよわたりのわさにつけても 「(29・オ)